町医者だより

平成29年09月号

＜発行・お問合せ先＞
おおわだ内科呼吸器内科
院長　大和田　明彦
市川市南八幡４－７－１３
ｼｬﾝﾎﾟｰﾙ本八幡２階
ＪＲ本八幡駅南口(シャポー改札口)
２分ミスタードーナツ並び
ヘアサロンAsh向かいビル2階
電話０４７-３７９-６６６１

おおわだ
内　科
呼吸器内科

慢性閉塞性肺疾患（COPD）への軌跡

肺気腫、慢性気管支炎を総称して慢性閉塞性肺疾患（COPD)といいますが、先進国の多くでは喫煙によって起こる肺の破壊を伴う慢性気道炎症で、気管支喘息と異なる炎症です。
もっとも喘息とCOPDの境界線はかなりあいまいになっており、COPDに見られる好中球性炎症が、喘息でも見られ「好中球性喘息」という言葉も使用されています。逆に好中球性の炎症と言われているCOPDにおいても喘息に見られる好酸球性炎症の関与が取りざたされています。

COPDになりやすい呼吸機能パターン

ちょっと古い論文ですがニューイングランド医学雑誌の２０１５年７月９日号に４０歳未満から観察を始め喫煙者の中のどのような呼吸機能の変化（軌跡）がCOPDになりやすいか見ています。平均22年もの観察期間でデータを集められるのはコホート研究といって特定の地域や集団に属する人々を対象に､長期間にわたってその人々の健康状態と生活習慣や環境の状態など様々な要因との関係を調査する研究を欧米では多数行っているからです。本研究でもフレミンガムコホート（米国・マサチューセッツ州）、コペンハーゲン市心臓研究コホート、米国ミネソタ州のＬｏｖｅｌａｃｅ研究所が行っているコホート（ヒスパニックが多く含まれている）の３つのデータを使用して論文を作成しています。これらのコホートは観察開始時の年齢、喫煙量など少しずつ異なっていますが、最長２５年間観察しています。本研究によると４０歳未満の喫煙者ですでに1秒量が予測値の８０％未満の方（６５７名）の２６％（174名）が２２年後ＣＯＰＤになっています。４０歳未満の喫煙者で１秒量が予測値の８０％以上の方（２２０７名）では２２年後にＣＯＰＤになっている方は７％（１５８名）でした。この段階での結論は４０歳未満で呼吸機能（１秒量）の低下があるとＣＯＰＤになりやすいこと。もう一つは４０歳未満で呼吸機能が良くてもＣＯＰＤになってしまう人が１０％はいるということ。さらに、ＣＯＰＤになった方（１７４名＋１５８名＝３３２名）の半数が４０歳未満では呼吸機能が良かったが1秒量が急速低下（平均５３ｍＬ／年）していましたが、残りの約半数は若い頃から呼吸機能が低下しておりその後緩やかに１秒量の低下（平均２７ｍＬ／年）しＣＯＰＤに至っています。ＣＯＰＤは必ずしも急速に進行するものではなく、かなりゆっくり進んでいくことも多いということです。つまり、半数のCOPDの患者さんは４０歳前（若い頃）からリスクを背負っているということです。メディカルトリビューン インターネット版 ９月７日号によると世界疾病負担研究（GBD）のデータベースから１９９０～２０１５年のCOPD・喘息による疾病負担の推移を検証すると、COPDによる死亡数は１９９０年以降の２５年間で１１．６％増加し、２０１５年時点では３２０万人と喘息の８倍に上ったことが報告されています。COPDは冒頭に述べたように肺の破壊を伴うことに加えて全身の炎症性疾患と認識され、心臓血管系へのインパクトも多い疾患です。喘息と言われた患者さんは速やかにタバコをやめるべきです。